

国内研修報告書

～離島の農業・文化を学ぶ～

私が今回研修先として選んだ地域は、鹿児島県大島郡喜界町である。

喜界町は、鹿児島から 380 キロメートル、奄美市から 69 キロメートルの洋上にある。喜界島は南南西から北東に長く 14 キロメートル、南北の最長 7.75 キロメートル、周囲 48.6 キロメートルである。集落は海岸線に沿って展開し各集落の背部は農耕地となり、東南から南北に走る百之台丘陵に連なっている。概して平坦な島であり、河川という河川はなく、島の大半は隆起サンゴ礁であり、いまだサンゴ礁の隆起が続いていたりしており日本で唯一のサンゴ礁科学研究所がある。また、近年古代から中世の琉球列島史の解明上重要な遺跡とされる「城久遺跡群」が発掘され多くの研究者の注目を浴びている。さらに、より美しい村づくりを目指して運動している地域にしか認定されないとされる「日本で最も美しい村」連合（The Most Beautiful Villages in Japan）に認定されている。そして、つい最近「奄美群島国立公園」が正式に指定され、34 番目の国立公園が誕生した。国立公園のエリアは奄美市など 12 市町村の陸域と海域の計約 7 万 5 千ヘクタールで、喜界島も含まれている。

このように多くの誇るべき価値が残っている島であり私がテーマに選んだ「離島の農業・文化を学ぶ」のに適しすぎるほどであった。この島に約 1 カ月滞在し島の実態を調査した。

喜界島の実態

- 交通機関 島内は定期バスが循環しているが各家庭自家用車の利用の方が圧倒的である。島外へは航空機による鹿児島便が 1 日 2 便（往復）、奄美便が 1 日 3 便（往復）、船は週 5 便である。
- 教育 町立幼稚園が 2 園、保育園 2 カ所、小学校 2 校、中学校 2 校、高校 1 校ある。昔は、小学校 8 校ほどあったが少子化の影響で閉校して 2 校となっている。
- 医療機関 医療法人総合病院、医院（内科、小児科、歯科）が 5 ある。救急の場合も各病院が対応できる。
- 住宅 教職員住宅が各校区に設置されている。また、民家や一般の近代工芸を採り入れた借家も利用できるなど安心して居住できる。
- 買い物等 スーパーストア、ホームセンター、書店、電気店、衣料品店、釣具店、種苗店、居酒屋など多数あり生活に支障はでないが現代普及したネットショッピングなどになると離島であるため配達料が多くかかる。また、ガソリンも離島という面もあり政府が離島用の補助金を出しているも割高だ。

- 観光面 商工会などの人達、ツアー、女子旅などもいるが大半は仕事で来た人やリピーターが多い。また、女子旅で来た人が地域おこし協力隊になった人もいる。史跡、観光名所もそこそこあるがまだ観光だけを目的に観光客を呼ぶこむのは難しい一面もある。
- 史跡 日本史の歴史を覆すかもしれない「城久遺跡群」が発掘されたりしている。また、喜界島空港は旧海軍の飛行場を利用していたり、日本で唯一の戦闘指揮所跡など太平洋戦争の史跡など多数存在しており歴史的価値のある史跡が多数ある。

このように1カ月滞在していたこともあり島の実態をよくすることができた。

ここからは、研修テーマにも挙げている喜界島の農業の現状について記す。喜界島の農業は、さとうきびに依存しており島の約70～80パーセントの農地を使っている。さとうきび農家の年齢層は幅広いがやはり高齢者が多少多く感じられる。私は、さとうきび農家がこんなにいるということは儲かる農業なのでは？と思ったが現状は全くことなっていた。さとうきび、は1年間10aで約12万の収入にしかならないという。わかりやすくいうと1トンで2万円の収入にしかならないのだ。また、この2万円も政府が補助しているおかげで2万円なのだ。実際外国からの砂糖の原価はトン当たり6千円だが関税をかけて2万円弱にしているおかげもあり、さとうきびの需要があるそうだ。さらに、さとうきびの収穫は昔手などで行っていたが今は、ハーベスタという機械でさとうきびを刈り取っているのだがそのハーベスタを借りるのに約5千円程かかり実質の収入は1トン1万5千円くらいにしかならない。さとうきびにだけ依存している農家はこれに不満があるのもわかった。なぜ、あまり収入にならないのに育てているのかというと、さとうきびは手間が掛からないうえに台風などの災害に強く安定してとれるから依存していることがわかった。喜界島は、白ごまの国内生産が約9割であり日本一の生産量である。島に来る前は、白ごまにも大きく依存しているものだと思っていたが異なり、さとうきびの芽吹きが悪くなった畑などを潰しそこで白ごまを育てるそうだ。だから、さとうきび農家は潰した畑で夏にしか白ごまを育てることができず、さとうきび>白ごまを重視していることもわかった。また、島は、今マンゴー、トマト、カボチャ、とうがらし、ブロッコリーといった園芸野菜に力をいれている。

喜界島には、正確には分からなかったが移住者も毎年来ており、iターンも年1人はいる。その移住者が農家になる人もいるとか。喜界島の営農・就農の制度もきちんと整っておりほとんどの人が利用しているそうだ。島には、支援センターがあり年に2～3人が支援センターを利用している。支援センターでは、園芸野菜に力を入れており1年間農業関連で指導を受けつづ月10万円支給される。支援センターで支援を受け終えた後は、最長3年間喜界町役場からビニールハウスを借りることができ自立して農業が行えるよう経営基盤を固め、技術確立ができるようにするのが目的そうだ。また、国から条件付きで年間150万円

支給される制度もあるそうだ。このように制度はきちんと整ってはいるのだがやはり課題はあるようだ。1番の課題となっているのが農地確保であり、高齢者が多いが農地が余っていないのが今の島の現状なようだ。確かに、島に1カ月滞在したが荒地のような畑がなかったのが知ることができた。農地はないがやはり後継者問題は深刻なようでなんともいえない状況が続いている。

島に実際に長期滞在することによりネットなどでは知ることのできないことを知ることができた。私が研修テーマに挙げていた「離島という立地が不便なところで行われる農業の現状」について知ることだけではなく、島の農業も体験することができた。長期滞在したことにより、島の文化を知ることができた（島の全33の集落で各集落異なる方言を使ったり、家・車のカギを閉めないなど他にも多数）。島の人々は、喜界島は何もないというが私には知らないことばかりでとてもタメになった。都内では学べないことが学ぶことができ、とても貴重な体験を学生中にすることができ今後の将来について考える機会を得れたと思う。この経験が活かせるようにこれからも様々な地域に行って学び成長していきたい。